

京の手みやげ 岡部伊都子



新潮社版



京の手みやげ

昭和五十一年七月五日 印刷
昭和五十一年七月十日 発行

定価 八〇〇円

著者 岡部伊都子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話東京 (03)361-3111 業務部
(03)361-3112 編集部

振替東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・神田加藤製本株式会社

© by Itsuko Okabe 1976 Printed in Japan

京の手みやげ・目次

半	京ろうそく	金	京千代紙	箸	青竹の酒器
襟		網			
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
八	三	五	四	三	七

京焼……………一〇七

京筆……………一三三

薫香……………一三九

匙……………一五五

清水人形……………一七一

針……………一八七

あとがき……………二〇四

京の手みやげ

青竹の酒器

北山通りの植物園の裏、綜合資料館あたりを、東にむかって歩いていると、思いがけなく夕闇迫る空に、大きなまるい月が浮んでいた。

一九七四年の秋は変調だった。重苦しい不景気と、腐敗の政治によどむ人びとをさらに凍えさせるように、中秋が冷たかった。中秋のはなやぎを味わう刻もなく、一足とびに冬めいた。木々の葉も、急激な冷えこみにかじかみ、黒ずんでしまった。

ようやく、すこし気温のゆるみを覚えた晩秋は、すでに散り紅葉。しわしわの落葉が、くるまのゆきぎにあふられて、歩道によせられている。足もとのかそけ葉音に氣をとられていて、ふと目をあげると灰白い満月である。それが、たちまち比叡の山の背にかくれてゆく。あれあれ。あれは月ではなかったかしら。月ならどんな高くのぼっていくはずなのに……。なんだか、わたし自身が錯覚していたような妖しい氣になる。いや、たしかに東の空

だもの。夕方だもの。白いもの。あれは月だ。南へ低く横に動いたのだ。

こんな時、やはり京の空だなあとという気がする。京に住んで十年、この十年に京は大きく変った。いまでは京都といわれるだけで、拒否反応がおこるほど、いわゆる観光京都になってきた。いまさら京でもあるまいと、住民としては憂鬱になることが多い。けれど、こうした夕ぐれに月を惜しむ心など、京に住む者に許されるものかもしれないと思う。

生き越し方をふりむけば、小さなわが人生のさし絵のように、さまざまな月がみられた。幼い日、大阪の町角で母に教えられて拝んだ月。自分の部屋の窓からは、町の家並を青く濡らして渡る月影に手をさしのべた。転地療養した郊外の自然……丈高い芦や大待宵草の群生のなかにたって眺めた月、百合畑の匂いにつつまれてみた夕月もある。

ひそかに慕っていた若者との別れに少し離れたその家まで送って行って、また送り返された戦争下の大阪の電車道。「人の世の月とはこういう月か」。戦地に移送される相手も、弱い自分も、ともに死を予定された若者同士のこの世の別れだった。灯火管制によって、夜が古代の暗黒をとり戻した頃の、月の明るさは今も忘れ難い。

人工の光りの乱舞する「消費」時代、人は月を失った。そして月を失っているという自覚

さえ、失ってきた。足もとの現実を忘れて、しんしんたる心の荒野をさまようことの多い非現実的な者にとって、月は心にみちわたる無音の照明だ。この色彩をもたない月光の意識に比べて、沖縄の南島の月は、晴れがましく輝かしかった。黄昏から夜にかけての空の鮮かな美しさに、くつきりときわだつ月や星。同じ月が、その仰ぐ場の風土のちがいによって、まったくちがう力となることを知った。女として、人として、転変の身には、よろこびに重なる朗らかな月よりも、うれいと通う淡い月が、より多く印象にのこっている。それは、よろこびに安住できず、悲しみにかえって鎮もるわが心柄こころがらによるものであろう。

夏中、『竹取物語』と親しんでいて、古い伝承の託された大竹林がなつかしまれた。町のなかに育った者は、大自然のすごみをほとんど知らない。竹藪といえど、せいぜい田舎家の背戸にある芝居の書割を思う程度で、さやさやと清らかな葉ずれの音や、「侘び」「寂び」などを連想する。「風情」の竹である。

まだ神戸に住んでいた頃、名神高速道路をはじめ通った。京都・大阪間は、名だたる竹の産地。道路から眺めるあちこちの野山にひとかたまりとなって揺れ動く竹の群は、かつて想像したことのないモダンな美しさであった。水墨画ではない油絵のせかい。集団美のせか

い。その後、千里丘の広大な竹林は万国博覧会の会場となり、大山崎から長岡・乙訓おとくにとつづく美しい竹藪は、開発の波によっておびただしく消えてしまったが……。

日本の美意識から、青竹をとり去ることはできない。直線の幹が奥深く並んでいて、木洩れ陽が青い幹の表皮をつやつやと光らせる竹藪。風の激しい日には、時折り高いところで幹と幹とのぶつかる音が、カーンカーンとこだまする。竹藪のなかの静けさには、他の木々の林とは異なる明るさと清らかさと静けさがあるように思う。竹林の七賢といわれる中国の故事は、移り変わる世を避け、俗を断った七人の賢者が、竹林に会したとされている。悠々たる清談はさぞ気持がよかつたろう。竹林が哲学的に好ましいのは、晩秋から早春までであらう。春、あたたかなれば筍があちこちに顔をだして、人びとの心をときめかせる。『万葉集』の「竹取」の仙女九人と翁とのあいには「季春」である。また、初夏には、まくなぎや、ぶとが目にちらちらする。夏から秋にかけては、文字通りきつい藪蚊が血を吸いに集る。

京都近辺には、きめ細やかに養われた立派な竹藪が多かった。有名な嵯峨竹、美味しい筍を産する乙訓の孟宗竹もうそう、竹の王といわれる真竹、地名にもみられる紫竹（黒竹）。洛西ニュータウンの建設では、百ヘクタール以上の竹林が住宅地となった由。乙訓のふかふか手入れ

されていた筍の土壌も、ばっさり断ち切られ、竹林の中は縦横に道が走っている。

「豊葦原」と同じ意味で、「豊竹」の国でもあったこの国の風土。竹は日本人の生活に密着し、すべてに活用されてきた。だのに、「竹博士」上田弘一郎京都産業大学教授の調査によると、全国的に竹はほろびつつある。三十年前の三分の二に減ったそうだ。「竹は大気汚染などの公害を守り、竹材の用途は広い。しかし、竹林の所有者も、竹産業者も零細規模であるため、有効資源でありながら十分生かすことができないうえ、農業と林業との間にあって、行政面でも竹林保護などの有効な施策がとられていない」(74・4・25朝日)といわれる。竹の国でありながら、竹を軽んじているわれわれ。

『竹取物語』には、神仙思想・渡来人への憧憬・仏教意識・道教観・羽衣伝説その他、さまざまな要素が織りまざっている。その多くの要素を貫いているのは、青竹にも似た清らかさといえよう。「野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使」う竹取の翁が、その竹林の「竹の中にもと光る竹なむ一筋」みつけた。「筒の中光り」たる竹を見ると、「三寸ばかりなる人、いとうつくしうて」いる。その出生が、青竹のさらに光る竹である。

ここでは美が、光りとして表現されている。「屋のうちは暗き所なく光り満ち」と形容さ

れるかぐや姫の美しさ。この光りは、まさか太陽の黄の光りではない。あくまでも幻想的な月の光りと思われる。そして五人の貴公子はもとより、帝の求めをも拒否する。この拒否が「影」と表現される。帝が姫を強いて宮中へ連れてゆこうとすると、「このかぐや姫、きと影になりぬ」。光りがさつと消えたのだ。

そして月へ還る。月光と月影である。それが青竹に託されて、この世の女人の姿となった。清いはずだ。

月明の夜の大竹藪を想像する。艶のある幹が、縞になって光っているのではないか。黒々とした深い竹藪のもつ夜気の匂い。細い葉の影が繊細に揺れてもいよう。「地震の時は、できるだけ竹藪に逃げなさいや。根がはっついて、土割れがないといいます」と、きかされていた。手近かに、竹藪を持つ人は羨ましい。古い土豪の家は、そのそばに必ず竹藪を持っている。それは、家を守る藪だ。また、いざとなるとその竹をきって、矢にしたり、竹槍にしたりして、闘ったらしい。

建築用材から生活用具、労働作業の道具、遊び道具、装飾品、祭事仏事の具など、数え切れないよきものが、竹で作られている。さらさらっとした弾力をもつ表皮、材木質の肉、中